

クライナラ諸形式の整理

——クライ補説——

星野 佳之

はじめに

筆者は「クライの諸形式の整理」―「暫定抽出」の副助詞、名詞化辞、助動詞―(星野二〇一四、以下「前稿」)において、クライ^(注1)に次の四種の別があることを論じた。

A 最低限の暫定抽出、副助詞、存在(+)

「皿ぐらい洗え。」

B 最低限の暫定抽出、文末名詞化辞、存在(一)

「することといえば、せいせい皿を洗うぐらいだ。」

C 単純暫定抽出、文中名詞化辞

「時々皿を洗うぐらいが、関の山だ／ちようどいい。／最適だ。」

D 単純暫定抽出、助動詞

「殊勝な子で、進んで皿を洗うぐらいだ。」

「暫定抽出」というのは、森山卓郎(一九九八)の副助詞デモに関する考察によるもので、「いわば知識をコントロールする段階での扱い」で、「ほかのものでもよいが思いつきとしてはまずは当該要素が提示される」ということを表す用法を指す。次の例で「か何か」

を「でも」に置き換えた場合に、非適格になるか若しくは許容度が下がるのは、「か何か」では当該例以外の別の要素も併せて並列的に例示されている(一例並列提示)が、「でも」では例示されているものだけが取り上げられている(暫定抽出)からである。

眠気覚ましにコーヒーか何か飲みなさい。紅茶でよかったですここにあげるけど。

* 眠気覚ましにコーヒーでも飲みなさい。紅茶でよかったですここにあげるけど。

コーヒーか何か飲みなさい。コーヒーが一番いいけど。
? コーヒーでも飲みなさい。コーヒーが一番いいけど。

暫定抽出の考え方はデモの文末制約をうまく説明する。デモが確定的過去と共起しないのは、「確定的事態の報告をする場合に、すべての要素をつくすのではなく、一要素を例示するということはあるが、それを偶然的の思いつきとしていうことはできない」からであるというのである。

* コーヒーでも飲んだ。

前稿では、クライ諸形式にもこの「暫定抽出」を見出せることを指摘した上で、A・Bには更に「最低限」という意味が加わる点で

共通する一方、その最低限のコトガラについて、存在を積極的に捉えるか抑制的かの違いがあることを主張した。「風の音くらい聞こえますよ。」(A)と言えば「何も聞こえない訳ではない」という主張になり(存在+)、「聞こえるのは雪の音くらいですね。」(B)と言えば「ほとんど何も聞こえない」(存在-)というに近い、ということであり、この意味の相違が副助詞クライと文末名詞化辞クライ(だ)という品詞論的違いに対応している。

また、このA・Bの他に、クライを含めて名詞として文中で働く場合(C)と、句を、コトガラを例示的に描写する文にする助動詞(D)の区別が更にあることも主張した。クライC・Dもモノ・コトを「暫定抽出」的に取り上げるが、A・Bのように「最低限」という意味はなく、「最適」とか「大」といったコトガラにも対応する(第三節で後述)。これを「単純暫定抽出」と呼んだ。

前稿の論旨を繰り返すのは最小限に留めるとして、この際に論じられなかったクライナラについて本稿では考察する。クライナラ、クライ、ナラそれぞれを比較すると、異なった振る舞いを見出すことがあるが、これらの整理を試みたいと思う。

1 次郎なら

引き受けてくれるんじゃないか。

次郎くらい

引き受けてくれるんじゃないか。

次郎くらいなら引き受けてくれるんじゃないか。

2 魚なら

鯛が食べたい。

*魚くらい

鯛が食べたい。

*魚くらいなら鯛が食べたい。

3 雨が降っているなら

タクシーで帰ります。

*雨が降っているくらい

タクシーで帰ります。

?雨が降っているくらいならタクシーで帰ります。

一 ナラに関する先行研究(一) 接続(仮定条件)

クライナラの考察の前に、ナラの特徴について先行論を概観する。まずナラの仮定条件法については、夙に山口(一九六九)が「接続助詞として独立させる」べきこと、また「(「たら」の仮定はより事象に即した表現として実的であり)」「なら」の仮定はより判断に即した表現として思想的である」ことを指摘した。この「判断に即して思想的」という理解は、久野(一九七三)以降、ナラの前件・後件それぞれの特性の解明に深められていくこととなるが、後件については「過去の出来事を表すことができず(例4)、これは「話し手の判断・意志・決意・要求・命令を表さなければならぬ」という制約に由来している」(例5)という久野の主張がほぼ踏襲されていると言える。

4 *太郎が来るなら花子が帰りました。

入れます。(意志) / 太郎が来たなら、花子は帰ったに違いない。(判断) / 寒くなったなら、暖房を入れておけばよかった。(評価)

5 太郎が来るなら帰ります。(決意) / 寒くなるなら、暖房を

一方で前件については、「聞き手」の関与について議論が重ねられてきた。久野は「聞き手(あるいは人一般)の断定として、完全に同意しないまま(すなわち自分自身は、その正否に対する判断を下さずに)提出する」と指摘したが、蓮沼(一九八五)はそれを「ナラの用法の一面」として、前件が「I他者の意向・主張が関与する場合」の他に、「IIしない場合」「III定型的表現」の三者を区別した。

Iは「他者（典型的には聞き手）の意向・主張と、それを根拠とする話し手の発話意図（決意、判断、要求など）の関係づけを行う」用法、IIは「ある事態の真偽や実現可能性などに関してとりあえず可能な事態として話し手がP（前件、筆者）を設定し、それを土台にしてQ（後件、同）を導く」用法である。

これに対し、網浜（一九九〇）は、ナラを「事態成立の条件」（ナラb）と「話し手の推論」（ナラc）に区別した上で、Akatsuka（1983,1984,1985）等を踏まえ、他者の意向・主張の関与について、ナラという形式がそうした意味を本来的に持っているのではないだろう。（ナラc）は聞き手から得た新規の情報をマークするのであるため「他者の意向・主張」といった意味合いを帯びやすい。（ナラc）として用いられているような例が多いことから、このような観察がなされてきたのだと思われる。

と主張した。また鈴木（一九九三b）も、条件法の一般的性格としてまず「条件法として表現できるのは、話し手によってその条件が満たされない場合が想定されている場合である」と規定し、Akatsukaの「話し手が新たに得た情報は、非事実であり、時間の経過で事実に移行する」という仮説を「新規獲得情報は、話し手にとって事実としていまだ不安定なものであるといった言い方をすべきである」と修整した上で、

新規獲得情報や他者の主張・意図を問題とすることが多いのは、ナラ条件文の基本的な意味から生じる結果であって、それが、他者の発言を受ける場合などナラ条件文が確定的なことを条件にする場合が多いことの理由のひとつになっているに過ぎないのである。

と述べた。この網浜・鈴木の議論により、「聞き手」はナラの本質

的要件ではないことが明確にされたと言える。

かくしてナラの仮定条件の前件とは、蓮沼がナラのIIに見出した「ある事態の真偽や実現可能性などに関してとりあえず可能な事態として話し手が設定した」コトガラ、即ち「条件が満たされない場合も想定され得る」（鈴木一九九三b）コトガラであると、（蓮沼のナラのIも含めて）まとめられるのである^{（注2）}。6が「非文法的なのは、それが、夏が来ることに、あたかも疑いがあり得るかの如き表現だから」（久野）であるし、

6*夏になるなら、軽井沢に行きます。

7においては、「組長」とっては、家宅捜索を受けることなど考えがたい事態であり、「こんなこと」はしないのが当然であると思われるなどという事情があつて、そういったものが条件が満たされない場合として話し手に想定されていると考えることができる」（鈴木一九九三b）。

7（家宅捜索を受けた竹中組の組長が捜査員に怒鳴って言う）
「こんなことをするなら、裁判で争ってやる。」

ナラ節が「眼前の事態観察の「言語化」、あるいは「言語情報化」する」という理解も（田中二〇〇三）、以上のようなナラ前件の一面をおさえたものである。

また、8のように話し手自らが思いついたばかりのことを述べたり、9のように明らかに事実と敢えてナラを用いて「相手の不注意を衝く」（田中二〇〇三）例も、上記の理解によつて説明できる。

8（断った直後に）あ、山田先生と来るなら問題ないと思いますよ。

9「あいているなら、双眼鏡を貸して呉れないか」

以上をまとめると、ナラの仮定条件とは「新規獲得情報や他者の主張・意図を典型として、条件を満たさない場合があり得る事態として話し手が設定した場合において（前件）、どのような話し手の主張や判断が成り立つかということとを述べる（後件）文である」ということになる。

二 ナラに関する先行研究（二） 題目

一方「題目のナラ」については、三上（一九六〇）を踏まえた鈴木（一九九二）が「仮定条件法のナラ」との関連を論じる上で、次の二条件を規定した。

条件1 「ナラ」が主語を取らない。

条件2 ナラをハに置き換えるか、または、ナラを消去することによって、もとの文と近い意味の単文にすることができる。

両条件は題目ナラが単文内で働くことを確認するものである。これによって次の1は題目提示である一方で、10のみならず11もともに接続（仮定条件法）であることが明確に区別される。

1 次郎なら引き受けてくれるんじゃないか。

10 僕が鳥なら、飛んで帰るのがだ。

11 乗るなら飲むな。

その上で題目提示と接続の両者は関連して説明される。すなわち、「ナラは、あくまで条件形であり」、「単独の体言が条件として提示され、その条件に適合するものが後項として選ばれる」場合（12）と、「後項の述語で示されるような事態を成り立たせ得る成分を、条件として前項に選出する」場合（13）がある。前者は「その体言によっ

て示されるモノに関係するものであれば、何でも後項として有り得るわけで」、「ナラ」について言えば」のような意味の条件にしかならない」が、後者は「前提の条件を満たすものは何かということなのだから」「条件を満たさないもの（のグループ）に対する強い意識がある」り、「対比の色合いが強く感じられるということになる」。いわゆる「対比のナラ」は題目用法の一部ということである。

12 買い物ならスーパーへ行きなさい。

13 「歩けますか」「ええ、ゆっくりなら歩けます」

そして三上（一九六〇）が「相手から話し手に移りつつある題目」、益岡・田窪（一九九二）が「相手が持ち出した話題を主題として情報を与える場合に用いられる」と記述したものについて、「既に言語場に持ち出されたあるものに関して、「それに関して言えば」と言う」用法として、前者に属するというのが鈴木の説明である。

丹羽（二〇〇六）の次の説明も、題目と接続に共通の基盤を見出すものである。

「SならT」などの仮定条件文は、「Sという世界を設定して、その世界でどんなことが成り立つか」というとTが成り立つ」ということを表す。ここには「Sを提示して、それに何が割り当てられるか」というとTが割り当てられる」という課題構造が成り立っている。その点、題述関係と共通しており、題目を表す形式と仮定条件を表す形式との間で派生関係が成り立つことが可能になる。

そして次の例を挙げた上で、「なら」が（特に対比性を帯びずに）題目を表す場合、（45）（46）のように相手を受けた表現でなければならぬ」と述べ「受取題目」と名付けた。

14 （45） 太郎君いる？——太郎なら遊びに行つたよ。

15 (46) 金は大丈夫か? —— 心配するな。金なら山ほどある。

以上の先行研究を踏まえれば、題目のナラと接続(仮定条件)のナラは、品詞上の区別はあっても、「仮定条件」という共通の基盤を有し、特に「受取題目」の用法と「聞き手の主張を踏まえる条件節」とは、同じ論理で説明できると考えられるのである。

このようなナラの理解を前提にした場合、ではクライナラについてはどのように整理が可能であるか、次節以降考察に進む。

三 題目のクライナラ

クライナラにも、題目(前掲1)と接続(同3)の両者が見られることは自明とみてよからう。本節ではまず題目用法について考察する。

1 次郎くらいなら引き受けてくれるんじゃないか。

3 雨が降っているならタクシーで帰ります。

1のようなクライナラは文中体現に直結しているのだから、これと比較するにあたり、前稿のクライ四形式のうちでまず検討されるべきなのはA・副助詞かC・文中名詞化辞のいずれかであろうが、Cは直ちに斥けられよう。Cのクライとは

16 20位くらいが、「関の山だ/ちようどいい/ベストだ」。

の如く、クライを含めた語句が、最小限とも大とも序列化することはせず(「単純暫定抽出」、文中で体言として働くものである。資格助詞が後置されることから体言相当であることは明らかであるが、16の例からガを取るとクライCとしては成立しない。副助詞として題目を提示する場合は「最低限の暫定抽出」で、かつ存在を積

極的に捉えるクライAなのである。

17? 20位くらいゆ、「関の山だ/ちようどいい/ベストだ」。

クライC

18 20位くらい、「なんてことない/朝飯前だ/わけないだろ?」。

クライA

ここで問題のクライナラに目を向けると、クライCに対応する文中名詞化辞の用法はない(19)。

19 * 20位くらいならが、「関の山だ/ちようどいい/ベストだ」。

一方で題目としての例文(20)は適格である。よってこれを、クライC、更にナラと比較してみることにしよう。

20 20位「くらいなら/くらい/なら」、「なんてことない/朝飯前だ/わけないだろ?」。

ここで指摘できるのは、まず三者のうち、ナラとクライナラの二者が「受取題目」として働く点で共通することである。

21 (外国語に堪能な人を探しているのですが。)ドイツ語なら話せますよ。

22 (同)ドイツ語くらいなら話せますよ。

21・22の違いは微差のようにも感じられよう。しかしその題目に対する述部は、24の如くクライナラの方により制限が多い。この点はクライの有り様と同じである(25)ことから、クライナラもコトガラを最低限のものとして差し出すと見てよいだろう。

23 ドイツ語なら山田さん「がいいですよ/しかない/で十分だ」。

24 ドイツ語くらいなら山田さん「?がいいですよ/*しかない/で十分だ」。

25 ドイツ語くらい、山田さん？がいいですよ／＊しかない／で十分だ。

次に、21・22の間を「語学に堪能な人」から「ドイツ語に」に替えると、クライナラの方が許容度が落ちる。

26 ドイツ語に堪能な人を探しているのですが。ドイツ語なら話せますよ。

27？(同) ドイツ語くらいなら話せますよ。

「外国語」という幅があるときに「ドイツ語」というものを取り上げることはできても、「ドイツ語」という設定に対して「ドイツ語」は返しにくい。これは、ナラの場合は単純に「受取」として働くのに対し、クライナラの場合は受け取るだけでなく、更に「最低限」の意味が表されているためと考えるべきだろう。

他方、クライナラの場合は28と29のいずれも成立する。より言いやすいのは前者であると思われるが、29も例えば「この俺が(ドイツ語くらい話せるさ)」といった尊大な口吻なら許容度が高いのではないか。

28 (外国語に堪能な人を探しているのですが) ドイツ語くらい(は)話せますよ。

29 (ドイツ語に堪能な人を探しているのですが) ドイツ語くらい話せますよ。

そしてこれは「題目の受取」とは別のものである。仮に相手の間に「最低限」という要素を明示させて「せめてドイツ語でいいから話せる人はいませんか」というようにしたところで、29のように答えれば、それは喧嘩腰か反論的な応答であって、26のナラのようなニュートラルな回答にはならない。また、30は独り言としても想定できるが、31の方は無理であろう。

30 ああ、ドイツ語くらい話せたらなあ。

31 *ああ、ドイツ語「なら／くらいなら」話せたらなあ。

クライナラが「ゼロになりかねない」という現状を意識して用いられることは前稿で主張するところであるが、それとナラの「仮定条件」とは自ずと別のものであり、クライナラのものに「受取」の用法はないと考えるべきである。

このように、クライナラは、クライナラそれぞれ異なる表現に与る。クライナラの複合副助詞と言ってよいようなものではないが、三者それなりの意味の分化を認めるべきであろう。

さて、鈴木(一九九二)はナラについて、「題目解説関係としか言えないような文」に用いられる場合(32)と、格関係が背後に潜在していると認められる場合(33)の両様を指摘した。

32 (今日は魚料理にしましょう) 魚なら鯛が食べたい。

(小川さんの趣味は何ですか) 小川さんなら釣りが趣味です。

(君は何を飲みますか) 僕なら紅茶だよ。

33 その男ならきのう店に来ました。(男が来た)

窓ならもう閉めましたよ。(窓を閉めた)

男は見たことありませんが、横に写っている女なら会ったことがあります。(女に会った)

副助詞類は一般に、例えばハ、モ、サエなど、そしてクライナにも両様のあり方が見られるものである。

34 魚は鯛が食べたい。／その男はきのう店に来ました。

僕も鯛にしよう。／その男もきのう店に来ました。

太郎さえ鯛だった。／その男さえきのう店に来たんです。

太郎くらい鯛でなくていいのに。／芸能人くらいうちの店に

も来たことがある。

クライナラの場合、次のように格関係が潜在する用法があるのは当然として、

35 芸能人くらいならたまに來ます。(芸能人が来る)

窓くらいならいつでも閉めてやる。(窓を閉める)

芸能人くらいなら會つたことがある。(芸能人に會つた)

「題目解説関係としか言えないような文」を考へることはなかなか難しいが、全くないというわけではない(24、36)。

24 ドイツ語くらいなら山田さんで十分だ。

36 太郎くらいならお茶漬けでいいのに。

これは、単にコトやモノを取り上げてテーマにするのではなく、「受取」や「事態観察の言語化」等、「条件形」として題目を設定するナラの有り様の上に、更に「最低限のコトガラがゼロではなく存在する」というクライの差し出し方も加わるため、クライナラの設定する条件がより細かくなり、該当する文の範囲もそれだけ狭まるのであろう。これもクライナラの複合的性格の現れといえる。

以上本節では題目のクライナラについて考察した。次節では接続のクライナラに考察を進めるが、その前に次のことに言及しておくたい。

接続のクライナラとは、ナラのそれと同様に、句と句を結ぶものであることは言うまでもないが、次の三者のうち39は、形式上は二句あつても、本節で考察した題目のクライナラである。

37 ここにいるくらいなら寒さにも強いだろう。

38 ここにいるくらいならすぐ出発した方がいい。

39 ここにいるくらいならお安いご用だ。

クライナラが句を体言化しつつ、題目として提示しているのであつて、「ここに」いることとお安いご用である」という一つのコトに収まる単文だからである。次の24と40の構文的な違いは、題目が単独の名詞であるか、体言句であるかの違いに過ぎないということである。それはクライに41と42があるのと相似の関係にある。

24 ドイツ語くらいなら山田さんで十分だ。

40 ドイツ語を通訳するくらいなら山田さんで十分だ。

41 ゆうべ徹夜で計算したところに依ると、三百円で、素晴らし
い本が出来る。それくらいなら、僕ひとりでも、どうにかでき
そうである。(「ダス・ゲマイネ」太宰治)

42 朱でまるを描くくらいなら、己だつて出来ると思つたが、うっ
かりそんな事を云うと、すぐ「じゃ、やつて見ろ。」ぐらいな
事になり兼ねないから：
(「田端日記」芥川龍之介)

先の37・38の場合は「ここに」いることが「寒さにも強い／すぐに出発した方がいい」ことの主部になっているわけではないのであつて、両句はそれぞれの節として並立しているのである。次節で考察するのはこの類である。

四 接続(仮定条件)のクライナラ

結論から言えば、本稿は37・38を別々のクライ(だ)に由来するものと考ええる。

37 ここにいるくらいなら寒さにも強いだろう。

38 ここにいるくらいならすぐ出発した方がいい。

前者37の類は、クライD(クライダ)で、句を、コトガラを例示的

に描写する文にする助動詞のナラ条件形であろう。

- 43 帽子も羽織も質に入れたくらいなら電車賃がないという事も可能である。 (「蒸発皿」寺田寅彦)

これは「眼前の事態観察」(a)を「条件を満たさない場合があり得る事態」(b)として条件節化したナラの要素と前稿のクライDの要素が、単純に掛け合わされた文であると見てよい。このナラの性質は、逆に言えば、「例示的に暫定抽出した」(b)コトガラを「描写する」(a)クライDの特徴と近く、このため43の文をナラ条件節によらず44のように言っても近似的である(違いは、43は話し手にとって前件が必ずしも真ではない可能性があるのに対し、44は状況を表すためにとりあえず取り上げられたものとはいえ、一面の事実ではあること)。

- 44 帽子も羽織も質に入れたくらいだ。電車賃がないという事も可能である。

様態のソウダ、比況のヨウダと同じように、クライDもナラ形を持つのだが、近似的なa・bと、a・bの掛け合わせであるために、43は44と大差のない表現になるのである。

- 45 水がこぼれそうだ。何とかしなさい。／水がこぼれそうなら、何とかしたらいいじゃないか。

- 46 太郎が来るようだ。私は遠慮しよう。／太郎が来るようなら、私は遠慮しよう。

なお、44のクライDはクライB(クライだ)ではないことに注意されたい。これを「質に入れたくらいのこと(だ)」のように名詞述語としては理解できないし、想定される主語(彼)もコトではない。クライB(クライだ)の例を作るとしたら、「したことといえは、

せいぜい帽子も羽織も質に入れたくらいだ」などになる。この場合は主述ともに名詞で照応するのである。

話を戻して38やその類例を、同じくこのクライD(クライダ)のナラ形と理解できるであろうか。

- 38 ここにいるくらいならすぐ出発した方がいい。
47 彼女に嫌われるくらいなら、死んだ方がましだ。
48 そんなに綺麗に忘れてしまうくらいならば始めから教わらなくても同じではないかという疑問が起るとすれば…

(「鉛をかじる虫」寺田寅彦)

日本語記述文法研究会(二〇〇八)は47の例を挙げて、「彼女に嫌われること」がもっとも起こってほしくない事態であり、それが起こることを仮定して、主節の評価や意志・希望・命令の強さを明示する」と記述する。この類のクライナラを簡潔に記述したものと思われるが、必ずしも「望まない事態」だけに用いられるのではない。49は「三枚書ける」という事態を望まないのではなく、現状でほぼあり得ないと判断しているといったところであろう。

- 49 三枚書けるくらいなら十枚書けるが、材料もないし時間もな
い、どうしても書けないといって断ると、雑誌記者はそれなら
一枚でも二枚でもよいから書いてくれといい、芥川は二枚では
小説にならないといった。(「芥川原稿」室生犀星)

この用法の記述としては「もっとも起こりにくい、もしくは起こるべきではないと考える事態が起こることを仮定して…」とした方がより妥当であろう。その典型として「望まない事態」が含まれるのである。

この「もっとも起こりにくい、もしくは起こるべきではないと考

える事態」の表現は、既述のクライナラDの表すところではない。37・43では「ここにいる／帽子も羽織も質に入れた」が実現していると読んで特段の不都合はないし、更には次のように望ましい事態であつてもよいのである。

50 さっきのが答えられたくらいなら、次の問題は楽勝だろう。

ではここで検討している38の類は何に由来するか。これらの前件の、「もつとも起こりにくい、もしくは起こるべきではないと考える事態」という性質に近いものを、クライ各種の中に求めれば、それはやはり「コトガラを最低限のものとして捉える」クライAとBが、まずは該当する。

A 最低限の暫定抽出、副助詞、存在(+)

「皿ぐらい洗え。」

B 最低限の暫定抽出、文末名詞化辞、存在(-)

「することといえは、せいぜい皿を洗うぐらいだ。」

しかしクライAは除外される。というのはこれが文末に関わる場合は述語を分割する形を取る(51)のであつて、クライ(だ)にはならないからである。「クライ(だ)」の形を取つたもの(52)は、「せいぜいすることといえは…」のような文脈でBクライ(だ)と読むほかない(前稿)。

51 皿を洗うぐらいしろ。／皿ぐらい洗え。

52 皿を洗うぐらいだ。

クライAはコトガラを最低限という一方で、その最低限の存在はあるべきだ、という風にゼロから引き離す方向に積極的に捉えるものである。この点がクライBと決定的に違う点であるが、いま問題の38の類は、前件事態を抑制的に取り上げるクライBとの関連を見

るべきだろう。クライBでそもそも「最低限のコトガラはあつたにしてもゼロに近い」と捉えられたコトガラが、更にナラの仮定条件によつて「条件が満たされない場合」を想定されるために、前件事態の成立する余地は極めて低いものとなる。「もつとも起こつてほしくない事態」の表現に用いられる所以である。また、それほど要件を満たしうる後件の話し手の主張や意志はこれに相応して、「死ぬ」(47)とか「そもそもその行為をしない」(48)とか、若しくは「いっそあり得ないくらいの順境さえ出現してはおかしくない」と非現実的な状況を想起する(49)など、どれも極端に振れた事態を想定するものとなつてゐる。日本語記述文法研究会の指摘する「強さ」とはこれのことであろう。このクライナラは、クライBのナラ形と理解し、クライD(クライダ)のナラ形とは、区別するべきである。なおこの場合は、名詞述語のダがナラ形を持つと同様に考えるわけである。

53 君も学生だ。色々なことに挑戦しなさい。／君も学生なら、色々なことに挑戦しなさい。

クライナラのBとDは、ナラ形という点は同じでも、由来するクライ(だ)がクライBとDに対応して別種のものであるというのが以上の結論である。

さてクライBのナラ形たるクライナラは、ナラがそうであるように既実現の出来事に対して用いることも当然できる(前掲50は「さつき間に答えた」コトが既実現の事態)ので、この点でクライナラBとクライナラDを区別することはできない。だから次の54・55について、確定事態を前件に持つことを以て言うのではないが、これらはクライナラBではない。

54 かくのごとき人間に邂逅する英国だから、我下宿の妻君が生

意気な事を云うのも別段相手にする必要はないが、同じ英国へ
来たくらいなら今少し学問のある話せる人の家におって、汚な
い狭いは苦にならないから、どうか朝夕交際がして見たい。こ
う云う望があるから、へー行きましようとは答えなかったが：

〔倫敦消息〕夏目漱石

55 お前も馬鹿だね。それならそうと、なぜ早く僕に云わないん
だ。勿論僕は何にも尋ねやしなかったし、お前から進んで話せ
もしなかつたらうが、然し、母に打明けたくらいなら、僕にだつ
てすぐ打明けていいじゃないか。 〔不肖の兄「豊島与志雄」

これらは前件について、せっかくのことなのに利点を享受し尽く
していない(54)とか、序列として優先度の低いものである(55)、「馬
鹿」なことに「僕にすぐ打ち明け」ずに「母」には打ち明けた)とか、
ネガティブな含みが文章から読み取れはするが、これはクライB
の、事態の存在そのものを抑制的に捉えるものではない。54・55
に対応して、「英国へ来たくらいだ。今少し交際がしてみたい／母
に打ち明けたくらいだ。僕にだつてすぐ打ち明けていいじゃない
か」という文は成立し得るのであり、前件の事態の存在は認めて
いるのであって、後件も状況全体を解消してしまうようなもので
はない。前件に対する有効な事態がどのようなものであるか若し
くはあったかを、主張するのが54・55である。クライナラBとは
異なるものであると言わねばならず、これは既実現事態を取って
ナラで条件化したクライナラDなのである。

おわりに

以上、クライナラの諸形式を次の通り三種類に整理した。

A 最低限の暫定抽出、クライAとナラの複合副助詞、存在(十)

「ドイツ語くらいなら話せます。」

「ドイツ語を話すくらいなら山田さんがいいでしょう。」

B 最低限の暫定抽出、文末名詞化辞のクライBのナラ形、存
在(一)

D 単純暫定抽出、助動詞のクライDのナラ形

「帽子も羽織も質に入れたくらいなら電車賃がないという
事も可能である。」

いずれも前稿のクライ諸形式と、ナラが複合したものと考えてよい
と思われるが、クライもナラも、それ自体が用法に幅のあるもので
あるために、複合したクライナラにも相応の多様性があることを述
べた。クライナラについての記述と同時に、前稿のクライに関する
考察の補説としたい。

〔注〕

1 「くらい」「ぐらい」の両形があり、場合によっては片方が使い
づらい場合もあるが、本稿では前稿同様、両者を交替形と扱って
特に区別せず、クライと表す。

2 蓮沼のナラのⅢのような、定型的表現については本稿の考察は
残念ながら及ばない。

〔参考文献〕

- 網浜信乃 (一九九〇) 「条件節と理由節―ナラとカラの対比を中心
に―」(『待兼山論叢』第24号、大阪大学文学部)
- 久野暉 (一九七三) 「第12章「ナラ」」(『日本文法研究』(大修館書店)
- 鈴木義和 (一九九二) 「提題のナラとその周辺」(『園田学園女子大
学論文集』二十六)
- ―― (一九九三a) 「ナラ条件文の用法―聞き手との関係を中
心に―」(『園田語文』第七号、園田学園国文懇話会)
- ―― (一九九三b) 「ナラ条件文の意味」(『日本語の条件表現』、
くろしお出版)
- 田中寛 (二〇〇一) 「ナラ節条件文における発話意図―前提情報と
事態認識―」(『語学教育研究論叢』第18号、大東文化大学語
学教育研究所)
- 丹羽哲也 (二〇〇六) 「第9章 接続関係と題目」(『日本語の題目文』
和泉書院)
- 蓮沼昭子 (一九八五) 「「ナラ」と「スレバ」」(『日本語教育』56号、
日本語教育学会)
- 星野佳之 (二〇一四) 「クライの諸形式の整理―「暫定抽出」の副
助詞、名詞化辞、助動詞―」(『ノートルダム清心女子大学紀要
日本語・日本文学編』第三八卷第一号)
- 三上章 (一九五三) 「第四章 単式と複式 六、発言のムウド」『現
代語法序説』(一九五三、刀江書院。但し筆者は一九七二年く
ろしお出版による復刊版によって確認した)
- ―― (一九六〇) 「第三章 「ハ」の展開 1・Xナラ」『象は
鼻が長い』(くろしお出版)

森山卓郎 (一九九八) 「例示の副助詞「でも」と文末制約」(『日本
語科学』3、国書刊行会)

山口堯一 (一九六九) 「現代語の仮定条件法―「ば」「と」「たら」「な
ら」について―」(『月刊文法』第二卷第二号、明治書院)

Akatsuka, Noriko (1983) "Conditionals" *Papers in Japanese
Linguistics*. Vol.9. (くろしお出版)

―― (1984) "Conditionals Are Discourse-bound" *On
Conditionals*. Cambridge University Press

―― (1985) "Conditionals and the Epistemic scale"
Language, Journal of the Linguistic Society of America.
Vol.61, No.3

(ほしの よしゆき) 本学 文学部 日本語日本文学科)

キーワード＝クライナラ、ナラ、暫定抽出